

図巻

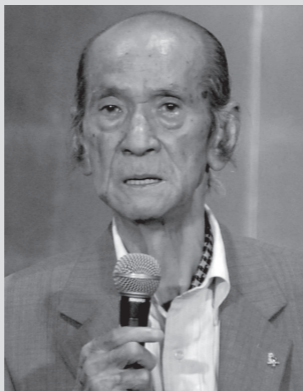
晩年

人間

2000年代編

〈第1回-2〉

関川夏央



写真提供：共同通信社

「生涯助ッ人」

—川内康範—

- かわうち・こうはん
- 作詞家・脚本家・政治評論家
- 2008年4月6日没(88歳)
- 慢性気管支肺炎

ものすごい「耳毛」の人であった。さわらせてもらった女性アナウンサーによると「タヌキの毛でつくった筆先みたい」だったという。もともと怖い顔なのにサングラスをかけ、痩せた、過剰なまでに態度の大きなおじいさんであった。なぜか著名な政治家たちと親しく、一九六〇年代から七〇年代にかけては演歌の作詞家として知られた。

しかし川内康範は、一九五八―一九五九年の連続テレビドラマ『月光仮面』の作者として、より有名であった。

冒頭に、「憎むな、殺すな、赦ゆるしましょう」という字幕が出る『月光仮面』の主人公・祝十郎いわいじゅうろうは、あまり頼りにならない助手・袋五六八ふくろごろはちを従

えた私立探偵だ。そんな設定は「捕り物帖」とおなじだが、国家的陰謀をたくらむ悪漢どもが出現するとき、祝十郎は俄然変身する。三日月のエンブレムをつけた白ターバンに白マスクとサングラス、白マントをひるがえした白タイトの姿になりかわるのである。

まだテレビが広く普及する以前の子どもたちは、日曜日の夕方、電器屋の展示テレビの前に群をなした。KRテレビ(のちのTBS)で平均四〇%、最高六七・八%という異常な高視聴率を得たが、それがかえって仇になった。そうでなくともPTAに嫌われた番組なのに、オモチャのサングラスと風呂敷のマント、月光仮面になりきった子どもが高所から跳び下りては怪我をする事故が多発するに至って、一年半で放映中止に追い込まれた。

アメリカのテレビドラマ『スーパーマン』とマント、タイツはおなじだが、ターバンはインドのシーク教徒から発想した。「月光仮面」の名前は、薬師如来の脇仏、月光菩薩がっこうからとった。脇仏だから「正義」そのものではなく、「正義の味方」と自称するのだという。

「スーパーマン」は空を飛んだが、「月光仮面」は小排気量のバイクで現場に駆けつけた。悪漢を退治するときも射殺したりはせず、体技だけでこらしめた。なにごとにつけ日本のかつ仏教的なヒーローであった。

川内康範の実家が寺であったから、というのが一般的な解釈だが、父親は函館で盛業した菓子問屋を営んでいた。それが川内康範の幼い頃、投機に失敗して破産、一念を起こして身延山での修行ののちに函館に戻り、自宅を寺にしたのである。

川内康範は小学校を出ると社会に身を投じ、住み込みの家具屋店員をふりだしに職を転々とした。北海道山中のタコ部屋に入れられたこともあった。

作家をめざして無賃乗車で上京したのは十七歳のときで、赤貧の中で必死にコネを開拓、戦前の日活撮影所にもぐりこんだ。

二十歳で海軍に応召、横須賀海兵団の一員となったが、古参兵に徹底していじめられた末に病氣除隊となったのは日米開戦直前だという。そのとき手を振って別れを惜しんでくれた戦友たちの多くが南海に没した。生き残った自分は卑怯者だという思いが、戦後、自前での海外戦没者遺骨収集活動と「国土」のふるまいにつながった。政治家と親しむようになったのも、この遺骨収集活動以後である。本来は国の仕事であるのに

申し訳ない、と謝意を表しにきた国会議員・園田直すなおとの面談が政治家とのつきあいの発端であった。

「国士」作詞家

無学歴を克服して三十代半ばに念願のシナリオライターとなり、新東宝を中心に濫作した。歌謡曲の作詞に手を染めたのは『月光仮面』の大成功とその打ち切り後のことだ。

一九六〇年、松尾和子／和田弘とマヒナ・スターズが歌った「誰よりも君を愛す」は大ヒット、第二回レコード大賞を受賞した。六六年には青江三奈を発見して「恍惚のブルース」、ついで「伊勢佐木町ブルース」(六八年)で彼女を不動のスターにした。ほかに「骨まで愛して」(城卓

矢、六六年)、「君こそわが命」(水原弘、六七年)、「愛は不死鳥」(布施明、七〇年)、「座頭市の唄」(勝新太郎、七四年)などの詞を書いた。

親がわりのような立場であった森進一には、「花と蝶」(六八年)、「おふくろさん」(七一年)など、四十曲ほどの詞を提供した。作曲もしたいと望んだ川内を、レコード会社は丁重に、しかし断固として謝絶した。

七〇年には警視庁機動隊の歌「この世を花にするために」(橋幸夫)を書き、稲川会のために「仁義の花火を天高く」(曾根康明)を書いた。

田中角栄を通じて小佐野賢治、児玉誉士夫と交遊して「右翼」と目され、また福田赳夫、鈴木善幸、竹下登らと親しんで「国土」といわれた川内康範だが、昭和天皇にも戦争責任はある、と公言して「右翼」に狙われたことがあった。そのとき、稲川会が「自主的に」ガードしてくれ

た縁で会歌を作詞したのだという。

川内康範は、平和憲法を守れといった。同時に、不戦の誓いは守りつつ、必要とあれば核武装すべしともいった。

演歌作詞の全盛期六〇年代が去ると、『月光仮面』を見た世代からは忘れられた。しかし、それより十歳あまり若い世代には、テレビの特撮番組、『愛の戦士 レインボーマン』（七二―七三年）、『光の戦士 ダイヤモンド・アイ』（七三―七四年）、『正義のシンボル コンドールマン』（七五年）の作者として知られた。「ダイヤモンド・アイ」は、その手に持つステッキの先端に嵌め込んだダイヤモンドから「外道照身電波光線」をげどうしょうしん発すると、怪物は前世のあさましい正体をあらわにするのである。七五年からは二十年間、『まんが日本昔話』の著作・監修を行った。

八四年、「グリコ・森永事件」のとき久しぶりに彼の名を聞いた。

毒を入れたお菓子を販売店の棚に置いて製菓会社を恐喝した犯人グループ、自称「かい人21面相」に、「おれが一億二千万円やるから手を引け」と呼びかけたのである。一億二千万円とは当時六十四歳の川内康範が、借金しても十年間で返せると計算した額であった。

「かい人21面相」から反応があった。

「あんだ 金 プレゼント する ゆうたけど わしら いらん わ
しら こじきや ない」

「わしらも 月光仮面 見たで おもしろかった」

結局「グリコ・森永事件」は未解決のまま時効になった。

「通俗」をつらぬいた一生

最後に川内康範の名前を聞いたのは、二〇〇七年二月、歌手森進一との「おふくろさん」騒動であった。

森進一は、川内作詞の「おふくろさん」に、「いつも心配かけてばかり、いけない息子の僕でした」など自身が考えた「語り」を付した改変バージョンを歌っていた。川内康範はそれが不快だと公に表明した。実際には、森はすでに一九七〇年代なかばからこのバージョンを歌っていたのだが、それは著作権の侵害であるのみならず、作詞者の心を踏みにじる行為だから、もう歌わせない、とこのとき川内は森に通告したのである。

積明のための最初の面会を、森は高血圧を理由に直前キャンセルした。さらに、「おふくろさん」という歌はすでに歌手森進一のものになっている、と非公式に発言した。それを知った川内は激怒した。

森進一は謝罪のため、川内の東京での常宿であるホテルを訪ねたが、会ってもらえなかった。日をおかず、森は青森県三沢の川内宅へ出向いた。しかし門前払いされた。芸能界でこういう問題が生じると川内が間に入っておさめたものだが、その当人とのトラブルでは時の氏神は望むべくもなかった。

それにしても三沢在住とは意外であった。

赤坂のクラブを、二、三十人の取り巻きを連れて飲み歩いていた時代、川内は古典的な「無頼派」のふるまいかたをした。七〇年代後半、体調

を崩した川内は死に場所をもとめるつもりで渡米した。四年間住んだロスアンジェルズで、のちのクリステイーナ夫人と知り合い、結婚した。彼女は米国籍を持つ啓子という名前の日本女性で、川内にとって三度目か四度目の結婚であった。以前の夫人たちとは、東京の家や著作権の一部をわたして別れていた。八〇年、新夫人をともなつて帰国、二年後、夫人の実家のある三沢に移住したのである。

結局、川内の死まで森進一との関係は修復されなかつた。作詞・作曲・編曲の権利は著作権法で手厚く保護されるが、歌手には著作権隣接権しか認められない。JASRACは、森の歌った改変バージョンは著作権の侵害にあたるとして、森の歌唱を禁じた。だがオリジナルを森が歌う権利はあるとした。しかし森進一は、「おふくろさん」のみならず、

川内作詞の四十曲すべてを当面封印した。

この一件後、持病の気管支障害に肝炎を併発した川内康範は、八戸市の病院に入院した。一時軽快して退院したものの、〇八年に入って再入院、四月六日に亡くなった。病名は慢性気管支肺炎、享年八十八であった。

生前、戒名はいらぬ、と川内はつねづね口にしていたが、やはり入院中であつた夫人と関係者が相談の上、「生涯助ッ人」を戒名と決め、位牌にもそうしるした。それは川内が自伝のタイトルともした言葉であつた。

『月光仮面』世代にとって、川内康範は最初から「へんなおじさん」

であった。ドラマをたのしみながらも、ヘンな設定だと子ども心に思っていた。よくいえば天衣無縫、ありていにいえば荒唐無稽、言語化はしないものの内心でそう感じていた。

六〇年代、作詞の全盛期も、彼の感情むきだしで濃厚な日本語表現に辟易しながら、これは戦後的日本語に対する否定の身ぶりなのだろうと察した。ならば、つい彼の歌詞を口ずさんでしまう自分にもそういうところがある。

晩年近くにインタビューした人によると、いつも青江三奈とかデヴィ夫人みたいなタイプの女性たちがとりまいていて、秘密結社の雰囲気があったという。古典的な「無頼の人」というより、信念を持って「通俗」をつらぬいた一生というべきであろう。